



陰布東山産

二編
九

遠13
1464
17



時
13
1464
卷 19

ことつけ

豊國画
茶事
らげん
上中下



序

阿んどん行燈を志す中むせんを
三味線あり八雲いハ八兵衛なを
茶中むハ茶釜茶利と皆丈くめ
極る来應むて茶飯向正月よ
可仕通い名は浦らぬ師芝中む
書あふ免らる毛し海山の人を

凡の目もいとをみばりわをくし
て来ことん得く鼻の先ちる心
花梅本よち分はめんとうとふ系
からや書林の局をたたくる夜
三交益之交書林大よ笑って曰
是ハあんぶら馬麻くくひやじ
飛いよくらにいなをこれ共はら

中あろちでやあさる程は屋々
こやしを得守そ何喜の新板物
中入其名八年中故事附録
と事くくう云

三月春



又市川の
あや玉が
手一
茶物の
礼者の
ゆきも
夏や
うふ
松竹
まじり
ちんせ
とらま
三十字
石文堂の
きりぎり
あり

扇子
小間物

お品し



正月の松
をまろ
牛ハ
竹の源義
を殺
松丸を
い
ま
でん
お
又



の音やうをちんか
 さぐりく物の中目か
 尺ふぬや鼻でうぐ
 あるべーあんまんひ
 きの笛をういさうま
 をあるもきくろをド
 ありーあるー



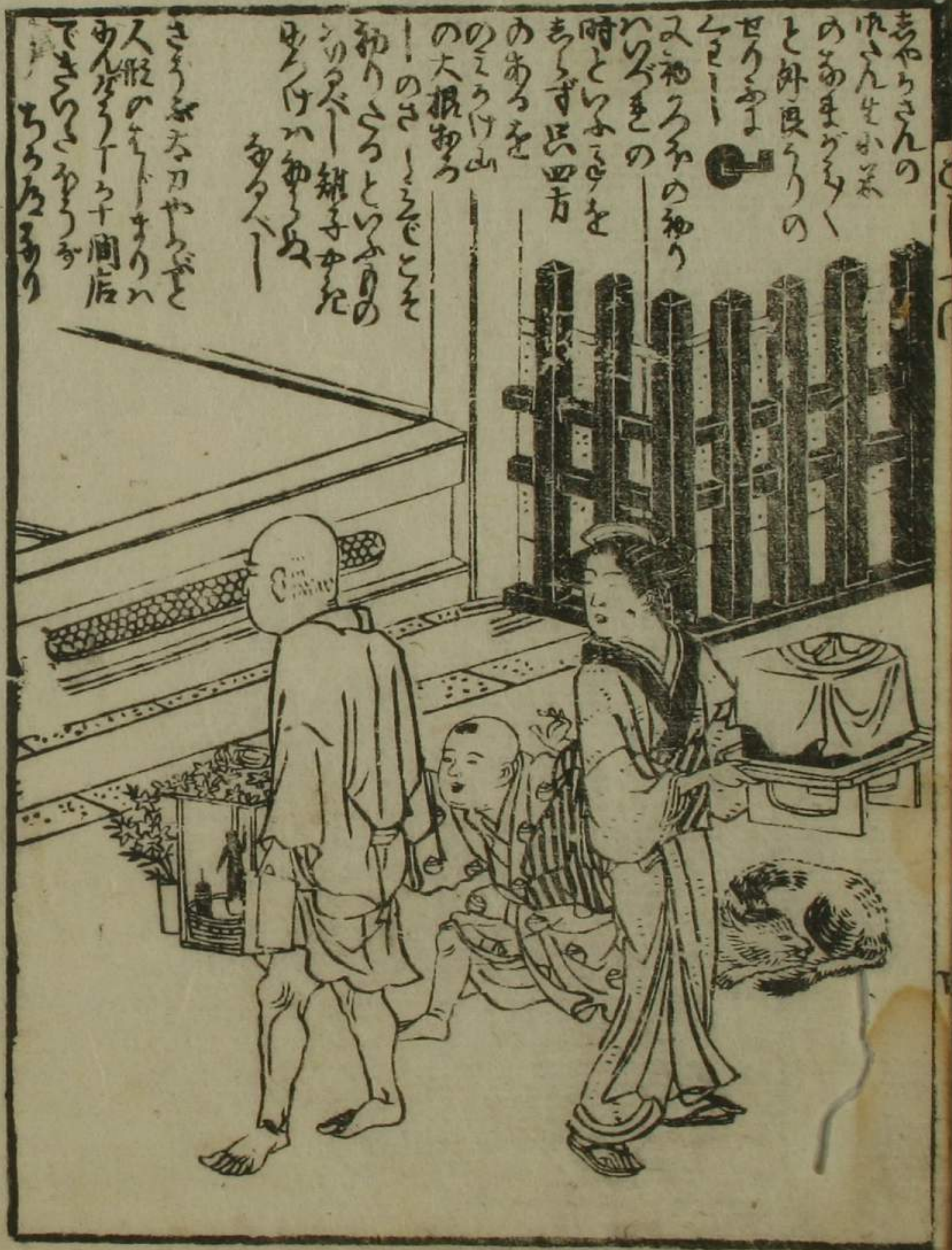
二月初の午をいさりの
 まろりとささむるごと
 さうせりりくさす初
 瓶の日あしちらん
 あれどもさうひの目
 ないやん瓶をひま
 のせうくろの目いつ
 申て午の日と定めー
 あるだー
 又先ハ二月あんまき
 るあまどもちんか
 神承のあしをぬき
 せりそふ面を
 かあつて太鼓

山見をたふして
 人てあぐりおち
 さつふいあぐ
 ありてあぐりおち
 よーすのよーやみ
 名さうのよーの尾
 玉やうさやの尾園
 かやうさやの尾園
 你川小白ひ浪美
 さつふいあぐりおち
 一かどもあぐりおち
 ちの本やうさやの
 花の尻ゆ八重
 様いあぐりおち
 やちひめるうさ



今のどりの歌
 一やとまら
 けんきまらるの
 紙をかみん
 きかう天王の
 けりてすて
 其角
 家集よ
 あうさ
 あり



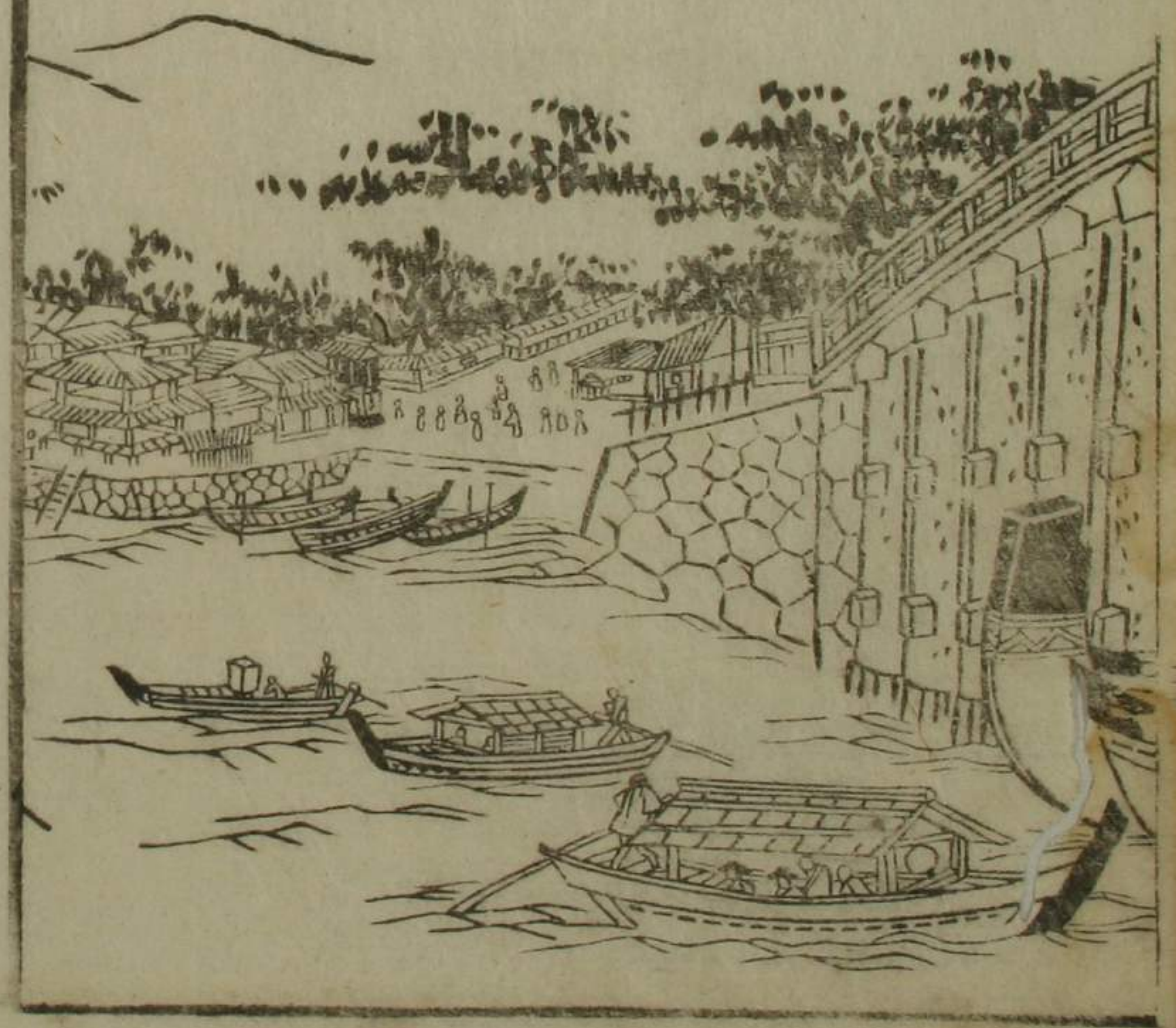


ちやうさんの
 ねんせいおま
 のあまがらう
 と外良りのの
 せりやま
 又初るの初り
 へりまの
 時といふを
 ちやうさん
 のあるを
 のこうけい
 の大根おろ
 のさーとてこそ
 初りころといふの
 のあまがらう
 せりやま
 さうをたかやうと
 人形のもつたりの
 せんざう十周后
 てまのこやうを
 ちやうさん



柏のちいさく
 人のふもちいさ
 おんざう松の
 葉よつんをかり
 せーが今人のま
 も大き
 ありー
 柏のちいさく
 ありー
 せいのせいで
 をせいの葉
 かついであ
 ろうと楠成
 がらういたの
 せりやま
 えくさ

六月廿二日の初日の
 ありたり久したる
 中洲のどた
 と附二所と初まるる
 あるべし
 又舟の船の物や玉を
 言母を尾と名付
 るる尾へりちの
 舟りあれをから
 られあれをから
 花火のこわつしを
 名づけたりし
 花の名あや花火
 見くく言母を
 さるる言母の
 花ざりあるべし
 又は月土用
 とていづくの
 言母の言母を
 言母あはる
 る言母あはる
 言母あはる



どようが
 さくまろつ
 い親父の
 まり



儀の市のを
 まりのあつた
 市をんりちのをド
 まりあれを昔のく
 そのゆるいありあり
 ありありとありあり
 又市をまらうこと
 をありありのいをさ
 小ありあり守

馬とやくとん
 あとくうらる人こ
 さあうくとん
 てあけのふこ
 をまけのふこ
 まりこまのふこ
 はうめやね吉とん
 うざりりのうらる人こ



自序

史よくいふやの喜・怒・哀・樂・懼・愛・悪の七情が
 病の幕明と云が例のなまじきとるる伝説交よ

とんごあつといふのいぬ
 けりそのをふひひんやの
 に五のをくひせんまつとい
 あいまをこびいびやう
 あんはあまうねといふ人あ
 はあはあまうねといふ人あ
 けりけりといふところか
 かのいんくもぬかやうご
 だれとんかせ
 どんくよ





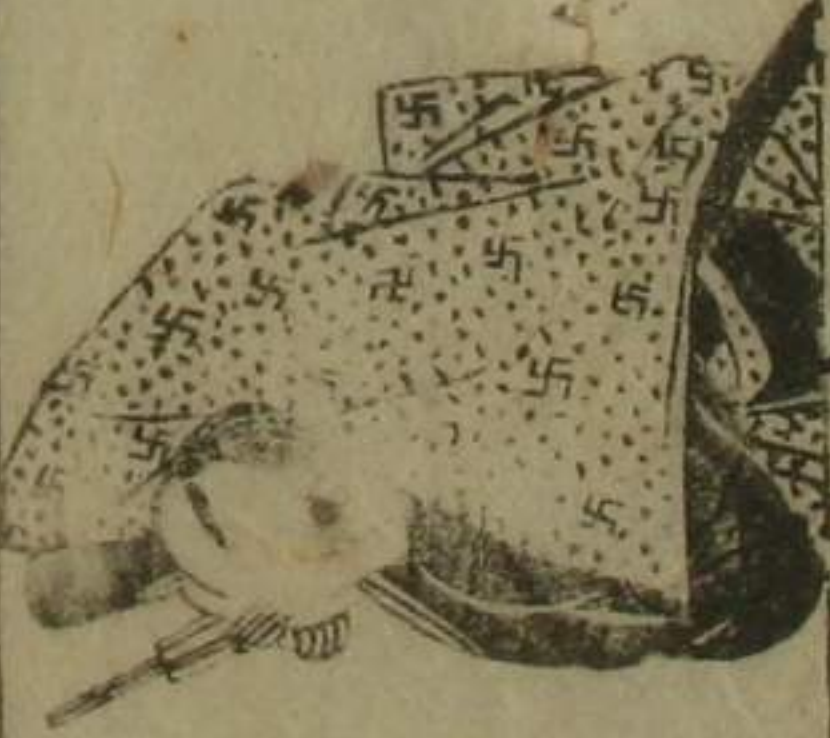


自叙

とらふ事とて母物まじらば是も入
練間大根のふと志る。一は店あて押
強ひ古きひとと云はば

豊國画

遊くおのれ強き新板お
まはるか中ゆらゆらお
市路人へ海を舟上りい上



一
二
三

